4．生物多様性と文化

日本の古代社会における原始信仰は自然崇拝であった。自然の現象、事物を神聖視し、また霊が宿るものとみなし崇拝した。直接影響を及ぼすものの他に、山、川、樹、泉などの霊がそれぞれの場所と結びついて存在し崇拝された。また、動物についてもその形態、動作、性質、またそれが人間に与える危害や恩恵が動機となって動物崇拝が行われた。

また、2000年以上も前から水耕農作民として生活をしてきた日本人はやみくもに自然の事物を崇拝してきたのではなく、農業生産の基盤を脅かすものに強く崇拝の念を持った。そして、自然現象の摂理を経験的にとらえ、それらを農事タブーとして規制したり、祭事の中に取り入れ応用してきた。

また、日本人の自然観に基づく生活行動の中には迷信と断定できる考え方や行動も少なくないが、その時代の持続的資源管理の方法としては理にかなっていると思われる考え方や習慣もあった。例えば、狩猟や採取の時期、場所、人数を規制し、乱獲による絶滅を防いだり、それらの規制を破ったものには制裁が加えられた。また、外来植物を土地の神が嫌うといって忌む風習や、枝振りの異なる木や巨木が神の休み木や霊の宿る木として伐採されず畏敬されたりした。

千葉県における人々の暮らしの中にも、生業として自然の摂理や生き物の習性を生かした生活の知恵があり、それが不思議と生物多様性保全の理にかなっている例も多い。

1．カタツムリ

館山市西岬の海辺に住む人々によって言い伝えられているもので、カタツムリが鳴くと3日後くらいに雨が降り、天気が悪くなる前には必ず海も波立つというもの。また、海ガメが波打ち際より遠いところに産卵する年は激しい日照りになるというもの。

2　シカ狩り

市川市北国文町の堀の内貝塚から出土したシカの頭骨を調べてみると、角座のあるものがほとんどで、保護増殖の観点からメスは捕獲しなかったのではないかと推定される。

3　やまあて

「魚は海にいるのでなく、山にいるのだ」という言葉のとおり、海上から目標となる山と海岸の重なり具合や離れ具合で、魚の多く集まる瀬や、自分の船の位置の確認、危険な場所などをあてたところから、漁民は目標となる山をあてと呼んでいたという。

鹿野山、君津市の人見山、鋸南町の鋸山などが挙げられる。

4　網とカシワ

現在の漁網は化学製品の網糸が使われているが、昔は、クズ、シナノキ、イチビ、シュロ、アサ、ワラ等が使用され、それらの腐敗防止にはカシワの皮からとったタンニンを活用したという。安房の外海地方ではこういった自然の素材が利用されていた。

（社寺林の写真）

5　ノリの養殖

昔、君津市人見ではノリの養殖に家の周囲に風除けとして植えられていた常緑樹で葉の大きいマテバシイからそだを作り遠浅の海に立て込んだという。ノリの胞子の成育が良かったという。

6．イワシあぐり

魚群を調べる知恵として夷隅郡大原町岩舟の漁民の間に伝えられていたもので、イワシの魚群を知る方法として

1）海上にかもめや鳥の群れが飛んでいるか

2）海面で魚がとびはねているか

3）ハミといわれるイワシがカツオなどに追われて密集し、海面が盛り上がっているか

4）魚の多い澄んだ海流と濁った海流の接する潮目があるか

7．沼の神

印旛沼の漁業の習慣で魚を取る時に、必ず一匹の大きな魚を、沼の神に返すとか、明日のたねにするといって放したという。

この種銭を残す思想は民話の「河童のくれた壷」（市原市養老川沿いに伝わる民話）にもあり、増殖の源であるタマシイのタマを使い果たさないよう心がける発想があった

8．山の神まつり

木更津地方では年の初めの７日は山に入らず、山の神にお神酒を上げ、仕事をせずに酒を酌み交わした。この日は山の神が木の種をまく日とされ、入山すれば怒りをかうといわれた。また、11月７日も山の神が種を拾いにきて変える日とされ、山に入ってはならないという禁忌行事になっていた。

9．鹿野山信仰

漁師の「やまあて」の山だったので、特に漁民たちの信仰が厚く、春のお彼岸の時期から５月にかけて、お花見をかねた鹿野山詣りが盛んだった。

１０．大福山

山頂にある白鳥神社の森として自然林が保護されている。

１１．三石山も霊場として保護されている。

１２．虫供養

百中の精霊を供養する虫供養塚が長生郡長生村の八積駅の近くにある。

１３．山武杉

麦や松、杉などを混ぜて栽培することにより、杉の適地でない場所の土壌を肥沃化して成長させる技法

大福山の神社とスダジイ林